

第一部 講演会〔前半〕

(1) シェイクスピアとともに歩む～公開講座を振り返って～

稲富健一郎（香川大学名誉教授）

ご紹介にあずかりました稲富です。ご丁寧な紹介をいただき、恐縮しております。講演ということになっておりますけど、どうも講演はできそうにないので、たぶん独り言みたいなことになると思います。45分間お付き合いをいただきたいと思います。

ちょっと目が見えなくなってきたので、明るくならないですかね。今ご紹介いただきましたように、今日のテーマは香川大学生涯学習の過去を振り返るということですが、私は一つのシェイクスピア講座を担当していただいただけですので、全体を俯瞰するということはできないと思うんです。従って非常に狭い自分の講座のお話しかできないと思いますが、ご容赦いただきたいと思います。

先ほども紹介していただきましたように2回私はロンドンにまいりました。ロンドン大学のウエスト・フィールド・コレッジという小さなコレッジです。ロンドン大学には30いくつもコレッジがロンドンの町の中に点在しておりまして、私が行きましたウエスト・フィールド・コレッジは最も小さいコレッジです。ハンプステッド・ヒースの外れにロマン派の若い詩人キーツがちょっと住んでいた家がありますが、そのそばにありました。2回ロンドンに行きましてロンドン大学に通いましたが、ここで話したいのは、モーリー・コレッジという大学です。サウス・バンクにあってロンドンの南の方にあります。この大学は長い歴史を持っておりまして、成人教育、生涯教育ですか、それを主にやっている大学で、そのためだけの大学なんですね。香川大学のように一部分が生涯学習というのではなくて、モーリー・コレッジ全体がそういう生涯教育の、あらゆる分野の講座を開いておりまして、私は2回留学しましたが、2回ともそこでいろいろなものを学びました。

友達もできて、この前もロンドンからその友達の一人が来ておりました。さまざまな講座が開かれているということ以外に驚いたのは、いろいろな社会の階層の人々、地下鉄の運転手の人とか、普通の家庭の奥さんとかが子どもを連れて来ていることでした。いろいろな社会の階層のいろいろな年齢の人たちが集まってきていて、そういう人たちと交わる機会がありました。とてもいい機会だったと思いますね。

そこで私が感じたのは日本との違いですね。日本の場合だと大学があります。そして大学があると、そこに学生が応募して入ってくるわけですが、大学に入る目的たるや大学で勉強することが目的ではなくて、むしろ大学を卒業した後の就職の方が主になっているということを感じていました。だから大学生は大学を卒業すると勉強しなくなる、学問がもうそこで終わってしまうわけですね。でもイギリスの場合はそれが無い。特にモーリー・コレッジの場合には、興味を持ったものをどんどん楽しんでいくという人々の姿を見て、日本と違うんだなという印象を持ったんですね。

これは非常に新鮮な驚きだったんですが、イギリスは成人教育にすごいお金を使っていて、私が2回目に行った時の首相はサッチャーさんだったと思いますけど、その時に予算をどんどんカットして、私もそれに反対する署名をしたりしました。とにかく学問であれ芸術であれ、楽しんでいる人々の姿を見て非常に感動しました。確かにその時の経験が、香川大学生涯学習センターで講義をする場合に生かされており、非常にありがたい経験をさせていただいたと思っています。

私がロンドンから帰ってきましたすぐに、あるいは2～3年たったころでしたか、名前はまだ別の名前だったんですが、大学教育開放センター長からぜひ講座を担当してほしいと言われ、お引き受けしま

した。何かもやもやとしているシェイクスピア研究に形を与えたいと思いましたし、また、自分がどのようにシェイクスピアを理解したかということと話したいという気持ちがありましたので。

今、ここにモーリー・コレッジの写真が出ていますね。じゃあ、先に、その授業風景をちょっと見てみましょうか。これはイタリア語を習ったイタリア人の先生です。経験されていない方は面白くも何ともないと思います。あまりたくさんのスライドはないんですが。

ちょっと話をそらすようになりますけれども、私は広島大学を卒業しましたんですが、1年生の時、教養課程に哲学の授業がありました。(最近は哲学とか文学というのは、どんどん減らされていってカットされて人員がどんどん少なくなっている。あれはとても憂うべき現象だと思っているんですけども。)少しそのお話をさせていただきたいと思います。2人の哲学担当の先生がいらして、1人の先生は非常に人気がありまして、教室に入りきれないくらい学生が詰めかける。もう1人の先生は、まったく人気なくて教室に行くと受講生が2〜3人しかいないんです。私はちょっとへそ曲がりなところがあって、大勢の学生が行くところには背を向け、学生の少ない先生のところで哲学の授業を受けたんですね。50年前に哲学を受けたんですけども、人気のない先生の授業をですよ、それを今でもはっきり内容を覚えているんですよ。その人気のない先生に言われた言葉を今でも覚えている。どういう内容であったかといいますと、人生をどういうふうに生きるのが一番いいんだろうかというテーマだったんです。理想的に生きるにはどういう生き方が本当に素晴らしい生き方だろうかという話だった、それを今でも覚えています。

その先生はどういうことを言われたかという、まず机を作るという例を出された。机を作るとしますね。一つの生き方は、机を作って、そして売る、お金を手に入れる、と、これが目的。これはほとんどの人がそうだろうと思うんですね。机を作る、売ってお金をもうける、それが目的になってくる。その場合に何が目的かという机じゃなくお金が目的になるわけでしょう。そうすると目的と過程がばらばらになっている、これはいい生き方とは思えないと言うんですね。

皆さんはどう思われますか。みんなこうやって生きているんだろうと思うんですね。世の中の人ほとんどの人が、自分はあまり面白くないけれども、お金を得るために一応自分の気持ちを抑えて嫌々ながらもやっていく。それでお金をもうけて、そして人生を何とかやっていく。これがほとんどの人の生き方なんじゃないでしょうか。

もう一つの生き方は、芸術的な生き方というふうに先生は言われました。机を1つ作るという場合ですよ、芸術的な生き方というのはどんな生き方なんだろう。先生が言われたのは、机を作る過程が大事で、過程を楽しむ過程で満足する。だから苦労して机の脚を切って作り、自分がそれを楽しんでいくという、これが芸術的な生き方で、最高の生き方だというふうに言われたわけですね。

それを今でも覚えているんですけども、つまり何かある目的と、そこに至る過程とかがばらばらにならない状態を楽しむ、それに満足するという人生が最高に素晴らしいのではないかということなんですね。それがずっと私の頭にあったわけですけども、シェイクスピアも同じようなことを言っておりまして、ハンドアウトがお手元にあるのでご覧になっていただけたらと思いますが、シェイクスピアの講座を24年間やってきたんですけども、重要な言葉が2つあると私は思っているんです。

一つは、1のところをちょっとご覧になっていただきたいと思うんですが、メメント・モリ (memento mori) というラテン語がここへ書いてありますけれども、それと次の2番、カルペ・ダイエム (carpe diem)、これもラテン語で2つともラテン語ですけど、よくシェイクスピア時代に使われた言葉です。ちょっと脱線しますが、シェイクスピア時代のラテン語といいますと国際語であったわけで、今の日本における英語みたいなもので、当時小学校のことをグラマー・スクールと言っていたんですね。グラ

マーは文法です。小学校の名前がグラマー・スクールとは、いかにもおかしな名前だと思うんです。そのグラマーというのは何かというと、ラテン語のグラマーなんですね。ラテン語の文法を教えていた。だからシェイクスピアも小学校のころはラテン語の文法を習っていたんですね。ラテン語が非常に重要だった。

それでここへラテン語を書いているわけですけども、まずメメント・モリというのは「死すべきことを忘れるな」という意味なんですね。これはどういうことかということ、人間は必ず死ぬということ、人間は必ず死ぬということをいつも覚えておきなさいという意味です。なぜそれが必要かということ、我々人間は変なことにすぐ惑わされてしまって本質が見えなくなる。すぐうわべに目がいって本質が分からなくなる。そういう人間の弱さをみんな持っているわけで、それに対抗するために何が必要かということメメント・モリ、いつも自分は死ぬ人間である、いつかは死ななきゃならない人間であるということを自覚することです。死から生を見直そうとする人生観はシェイクスピアの劇の至るところに出てくるんですね、人間は死すべきもの、必ず死ぬ、いつかは死ぬということです。

もう一つは次の2のところですよ。前者と関係あると思うんですけど、カルペ・ダイエム、イギリス流に言うとかダイエムです。たぶんラテン語の本来の発音はディエムだろうと思います。カルペ・ディエム。これは「一日一日をつかめ」という意味ですね、一日一日をつかめというのはどういうことかということ、「一瞬一瞬を充実して生きなさい」ということですね。

カルペ・ダイエムとメメント・モリは、関連があると思うんですね、人間いずれは死ぬ、皆さんも永遠には生きられないわけで、この瞬間、こういうふうにご一緒しているわけですけども、いつかは必ず死ぬという、その死ぬということをいつも感じるということ。死を感じることによって充実して生きる、一瞬一瞬を十分に生きる、2つはお互いに関連していると思うんです。その2つが連動して、人生を生き生きと生きさせる2つの句ではないかと私は思っております。ちょっと乱暴かもしれませんが。

私が教養部の時に話を聞きました、学生に人気のなかった哲学の先生の話に戻りますが、お金を得ることが目的であれば、目的までは意味がないわけですよ。我々が、今、生きているやり方では、お金が目的だから机を作る過程はどっちだっていいということになる。しかし芸術的な生き方になりますと、机を作っていく瞬間瞬間が喜びとなり、瞬間瞬間が満足となる、これぐらい素晴らしい人生はないということになるんですね。

シェイクスピアが繰り返し言っていることは、何事でも楽しむということが大事だということですね。いつでも楽しむ、それでいいんだ、現在この場を楽しみなさいとシェイクスピアは絶えず言っている、発信していますね。一刻一刻を楽しむということについてですが、またハンドアウトを見ていただけたらと思いますけれども、今日のテーマは「知の循環」ということで、知というのは非常に大事なことになると思いますけれども、シェイクスピアは時として知というものを否定することもあります。旧約聖書『伝道の書』に、「それは知恵が多ければ悩みが多く、知識を増すものは憂いを増すからである。」とあるように、知でもいろいろな知があるからだろうと思うんですが、単なる知だけを追求するということの危険性をシェイクスピアは知っておりましたね。

『じゃじゃ馬ならし』の引用文をそこへ書いております。ルーセンシオという若者が宮廷にやって来るわけですね。（イタリアでは昔は宮廷が学校の働きをしておりましたから、地方の若者は宮廷に行っているいろいろな学問を学んでいました。）そのルーセンシオがパドバに来るわけですが、その時に召し使いのトラニオに「どうしたらいいんだろうか、これから学問もしたいんだが」と言ったら、その召し使いがなかなかいいことを言うんですね。そこでちょっと見ていただきたいんですが、

楽しまないと身に付かないものです。
簡単に言えば一番好きなものを勉強なさればよい。
No profit grows where is no pleasure ta'en...
In brief, sir, study what you most affect.
(『じゃじゃ馬ならし』 1.1.39-40.)

というふうに言うんですね。これは召し使いとしては非常に気の利いた素晴らしいせりふじゃないかと思うんですが。嫌々ながらやるということじゃなくて、好きなものを楽しむということが、どれほど大切かということ。満足と喜びを得ていくということが、いかに大切かということをシェイクスピアはここでも言っているわけですね。

その次にハンドアウトを続けていきたいと思いますが、これは『十二夜』でフェステという道化が歌う歌の内容です。

恋とは何だろう、未来にあるのではなく、
今の喜びに今の笑がある。
未来に何が起こるか分からない、
ぐずぐずしていいことはない。
さあ、来てキスしておくれ、可愛い、可愛い、お前。
青春は長く続かないのだから。
What is love, 'tis not hereafter,
Present mirth hath present laughter:
What's to come is still unsure.
In delay there lies no plenty,
Then come kiss me, sweet and twenty:
Youth's a stuff will not endure.
(『十二夜』 2.3.49-54.)

というふうに歌うわけですね。歌自体も一瞬一瞬消えていくわけですけど、人生と同じですね。ここでは恋のことを歌っていますが、恋を人生に置き換えてもいいわけですね。人生は短いけれども、青春はもっと短い。日本の歌にもありますね、「命短し恋せよ乙女」という歌もシェイクスピアと同じことを言っているわけです。こういうふうに一瞬一瞬を楽しむということが実に重要である、一瞬一瞬に満足するということがとても大事なことであるということをシェイクスピアは繰り返し言っているんです。

その背景は何かといいますと、やはり先ほども言いましたように、一番最初の引用文ではありますが、メント・モリですね。人間はすぐ死ぬ、いずれは死ぬんだ、早く死ぬ人がいたり、遅く死ぬ人がいたりするけれども、例外なく全員が死んでいくという、認識が背景にありまして、それ故に喜びとか満足がいかに重要であるかということが自ずと浮かび上がってくるんだろーと思いますね。

私のことを言って申し訳ないんですが、私は高校の2年生の時に肺結核になりまして、もうたぶん死ぬんじゃないかと思っていました。高熱が続きましてすべての音がどんどん遠くに離れていくんですね。毎日毎日そういう高熱と、いろいろなことに悩まされ、レントゲンを撮ると左が真っ白だった。これが死ぬ

ということだなという感じを持つようになりまして、1年8カ月入院していたんですけれども、その経験、メメント・モリで、人間は死ぬんだという感覚が絶えず付きまとうようになりました。

私はシェイクスピアを読む時、あるいはシェイクスピアについて話す時、必ずそのバックには死があると感じています。ここで、シェイクスピア時代がどんな時代だったかとちょっとお話ししておきたいんですが、シェイクスピアの時代というのは、非常に素晴らしい時代だったことは確かですけれども、ペストがはやったんですね。肺結核と同じようにペストでたくさんの人が死んだ。シェイクスピアの生まれた町、ストラットフォード・アポン・エーボンという小さな町へ行きましたけれども、その人口の3分の1か3分の2かどっちだったか覚えていないんですけれども、それぐらい人口がペストで亡くなった。高松の3分の1の人口がぱっと亡くなるって恐ろしいですよ、そういう時代だったんですね。だからシェイクスピアが劇をやっていた劇場も、しばしば閉鎖になったんです。ペストが蔓延するとすぐ閉鎖になる。だからシェイクスピアの時代というのは死と非常に近かった。周りの人がどんどん死んでいくから、シェイクスピアの時代は、むしろ今の日本よりはずっと死が近かったのではないかと、死が近くに感じられたのではないかと思うわけですね。

それともう一つは内乱ですね、内戦、薔薇戦争というのがありまして、源氏と平家じゃないけれども、白薔薇と赤薔薇の2派に英国が分かれて争っていたんですね。それについてシェイクスピアは10の劇を作っておりますけれども、そこで戦争の告発をしている。死が非常に近かったんですね。血で血を洗う悲惨な状態が長いこと続きました。シェイクスピアも、もう嫌になっていたと思いますね。

エリザベス1世が戴冠して平和な時代が来るのですけれども、その後すぐ今度は清教徒革命が起こりました。これも内乱ですね。王党派と清教徒側が争う。ついに王様を処刑するというようなことが起こりました。イギリスはシェイクスピアの時代の前後、内乱で苦しんでいたんですね。死が非常に近かったわけです。だからメメント・モリが示しているように、いつも死のことを考えていなければならなかった。そうすることによって一瞬一瞬に満足し、一瞬一瞬が大切であるということを実感して生きていく、こういう生き方をシェイクスピアは重要だというふうに考えていたと思いますね。死を忘れないようにする、いずれは私も死ぬのだということを感じることにより、満足、喜びがいかに大事であるかを知らされるようになるのではないのでしょうか。従ってカルペ・ディエム（ダイエム）とメメント・モリ、この2つの点がシェイクスピアの人生観の根幹にあるんじゃないかと思っています。

ここで現代について考えてみましょう。それと関連して、皆さんと一緒にちょっとお金のことについて考えてみたいと思います。みんな我々はお金に全てを換算して生きている。お金だけあれば何とかかなというふうに考えて、生きる瞬間瞬間がおろそかになっているのではないかと思われるわけですね。例としてお話ししましたように、机を作る場合、極端に言えば作るのはどちらでもいいから、お金だけが欲しいということになってくるわけですね。ハンドアウトに挙げております『ウィンザーと陽気な女房たち』の引用ですけれども、「お金が前を行けば、すべての道は開ける」、お金が前を行ったら、お金が行く後ろには道がどんどんできてくる、開けてくる、つまり、お金さえあれば何とでもなる、どんなことでもできるという意味です。

古い話になりますけどホリエモンね、もう古くてお忘れでしょうか、人の心も金で支配できると豪語した人ですけど、ホリエモンさん、今どう思っておられるかちょっと聞いてみたいんですが。お金があれば何とでもできると我々は信じていて、保険を掛けたり、貯金をしたり、いろいろなことをしてたくさんお金をもうけて、そして自分の身をガードしたら安全だろうと何となく無意識に思っていないですか。私なんかも何となくぼんやりとお金があったら安心できるかなというような気がしているんですけども、ハンド

アウトにそれと反対のせりふを引用しております。

これは『ロミオとジュリエット』のせりふですけれども、「それ、金だ、人の魂には毒より恐ろしい毒だ。この忌まわしい世の中ではもっと多くの人を殺す。お前が売れぬと言うこんな大したものではない毒よりはな。」これは説明しますと、ロミオがジュリエットは本当は死んでいないんですが死んだと聞いて、自殺する決意をするんですね。自分の愛するジュリエットがいないこの世はもう意味がないから死のうと自殺する決意をして毒を買いに行くんです。毒薬を薬屋にね。ところが薬屋はその毒を売ったら私が死刑になるから、売れないと言うんですよ。その時にロミオが言う言葉ですね。薬屋、お前はこの毒薬を売ったら死刑になるので売れないと言うけども、実はその金の方が毒よりもっと多くの人を殺すのだと言っているんですね。

我々は金を一生懸命得ようとしている。逆に毒というのは嫌ですね。だけどよく考えてみると、お金だって危ないぞ、我々が普段何となくいいなと思い、寄り掛かろうとするものについて本当にそうなのか、信頼しているけど、本当に信頼に足りるかという問いをシェイクスピアは絶えず発信し続ける、ここもそうですね。お金って本当に大事な、本当にあなたを守ってくれるのかと言っているわけですよね。

三笠フーズが世間を騒がせている話がありますけれども、あれはひどいですよ、ものすごい暴利を得ているでしょう。政府から食べられない米を安く買って、ものすごい利益を上げていろいろなところに養老院、じゃないか、今は老人ホームというんですね、養老院と言うと怒られるので、正しくは老人ホームに売るとか、それから学校給食に売るとか、もうめっちゃくちゃでしょう、金のためなら何でもする。それで食べた人は死ぬかも分かんですよ。黴と、それから農薬とかいっぱい入っている、食べるわけにはいかん。それはまさしくこのロミオが言っていることと同じことですよ、もう本当に世の中どうなっているのか。

ここで脱線しますが、シェイクスピアについて24年間お話ししてきましたけれど、私はこの前、澤地久枝さんのお話を聞いて、シェイクスピアについて24年間話をし続けてきたけれども、本当にそれでいいのかなと思いました。なぜそう思ったかという、シェイクスピアを鑑賞するだけでいいのかな、シェイクスピアは、絶えずこれはおかしいと思わなければいかんというふうに言い続けているのに、それを放っておいていいのかなという感じが、あの講演を聴いてしまったね。特に戦争についてですね、戦争というのがどんなに恐ろしいものかということですね。それは我々でも食い止められるんだという勇気を与えられました。それは重要なことです。だから私たちはじっとしているんじゃなくて、正しいと思ったことは行動しなければならんんじゃないか、という気持ちを起こさせられたという気がするんですが。今の話ですけど、お金がない、お金がないと言いながら、軍備は増強されて人殺しをする兵器が高性能のものができてきて、そして、それにお金に糸目をつけずどんどん使っている。つまりこれだってお金のことより兵器を造ることに喜びを感じている人がいるのかもしれないけれども、知りませんけども、それは恐ろしいことです。

だから現在を楽しみなさい、満足しなさい、生涯学習によってそういうことが可能になる、これは大事なことです。しかし、ひょっとして高松に、今、原爆が落ちたらと想像してみましょう。たぶん広島の人だって60年前に原爆が落ちるとは、当時思っていなかったんじゃないですかね。今、高松に原爆が落ちてこないと我々も思っているけれど、ひょっと落ちてくるかもしれない。そうしたらもう鉄を溶かすような熱線が肌を焼くという恐ろしい地獄が始まる。そうなったら人生を一瞬一瞬楽しめなくなるじゃないですか。そういう戦争の恐ろしさを知らない世代がどんどん増えていて、何だか恐ろしい方向に向かっていくような気がするんですけれども。戦争が起こって苦しむのは一般の弱い市民ですね、上の命令する方

は安全なところにいるわけですから。

これはまたテレビで知ったことですが、イラクでアメリカ兵が発砲する率というのは25%ですってね、だから本心はほとんど撃ちたくないんだということですね。アメリカ兵が銃を構えて発砲するという確率は25%にとどまっている。しかし国家がそれをあおる。つまり敵が人間だと思えば兵士は撃てないんですって。敵が人間だと思わせない、敵は人間以下、動物であると思わせるような教育をするんですってね、そうすると発砲率が上がってくる。そんなことまでして何故戦わなければいけないのか。

そこに引用しておりますけれども、シェイクスピアも内乱で苦しんだ過去を描いたんですね、薔薇戦争で家族がめちゃくちゃになっていく。一番最初は社会の上部から腐っていくんですね、政治の上の方からどんどん下がってきてついには家庭が破壊される、その状況を歴史劇でシェイクスピアは克明に描いているんです。引用を見て下さい。『ヘンリー6世』の第3部を引用しております。これはどういう状況かというと、赤薔薇と白薔薇に分かれて親父と息子が戦っているわけです。知らずに息子が相手方についた親父を殺す。昔は常套手段だったらしいけれども、息子が殺した相手の財布を取ろうとする。そして顔を見たら自分の父親だったというんです。シェイクスピアは、その時に戦争が残酷であるかということ、そこで示しているわけですけど。ちょっと読んでみます。

そして俺は、その手で命を与えてくれた父から、
この手で命を奪うことになってしまった。
許してください、神様、知らずにしたのです。
許してください、お父さん、あなたとは知らなかった。
涙で血痕をぬぐい去ってしまおう、
涙を流しきるまでもう何も言うまいと。
And I, who at his hands received my life,
Have by my hands of life bereaved him.
Pardon me, God, I knew not what I did!
And pardon, father, for I knew not thee!
My tears shall wipe away these bloody marks;
And no more words till they have flow'd their fill.
(『ヘンリー六世・第三部』 2.5.67-72.)

何ともつらい思いだっただろうと思いますね。家族というのは一番大事ですが、戦争というのはそれを破壊してしまうということですね。生涯学習を楽しむためには、社会は平和でなければならない。戦争の中では不可能でしょう。つまり、前提条件は平和であることでしょう。そのためには、言葉のレベルにとどまっていなくて、行動へと移行しなければならないと思われます。

生涯学習というのは、結論になりますが、就職とか資格取得とか何か目的があってそれに向かって学習するというのはなくて、その学習自体が目的になる、学習自体に満足と喜びを感じられる、そういうものであって欲しいし、そういうふうになるように努力を24年間続けてきたつもりですが、成功したかどうかちょっとよく分かりません。

最後にモンテニユの言葉を引用して終わらせていただきたいと思います。一番最後に書いております。「人生の有用さは長さではなくて使い方にある。長生きしてもほとんど生きなかった者もある。年数

ではなく意思にかかっている。」テレビを見ると、いかに命を長くするかということばかりで、その生きている瞬間をどう生きるか、どうやって意味あるものにするかという視点がないですね。ほとんど料理の番組か健康の番組か、ただ生きる年数を長引かすだけの話で、生きている間をどう生きるか、どうやったら充実できるかという、そこには何のスポットライトも当てられていない。生涯学習がそこにスポットライトを当てて、注意を引いて、そこに何か生きる意味を見いだしていくということが必要なのではないかと思います。ちょっと時間も過ぎましたけれども、これで独り言、訳の分からないお話を終わらせていただきます。どうも失礼しました。

司会

稲富先生、どうもありがとうございました。非常に深いお話であったと思います。楽しみとか喜びとか言うわけですが、その楽しみ、喜びって何だろうか。先生の言葉の奥にまだあるんだろうな、それが哲学であったり、人の誠意というものであったりするものなんだろうと感じております。普通は現在の事象の中に過去の出来事、あるいは過去の教訓などを用いて話をするということですが、絶妙にといいますか、過去の話をしてしながら現代のホリエモンを持ち込んでみたり、あのテクニックは私も学ばなければいけないなと感じました。

それでは第一部の後半に入りたいと思います。続きまして2つ目の講演は「公開講座の源流を探る」、当センター准教授の山本珠美より発表いたします。